

第11章

質的研究法と現象学的アプローチ:現象学的心理学ワークショップの報告

加藤直子

総研大先端科学研究科生命共生体進化学専攻学生

1. はじめに

2005年に米国カリフォルニア大学バークレー校の「オーラルヒストリー夏の学校」に参加して以来、ずっと「質的研究」に関わってきた。私は、「質的研究」のなかでも特にインタビュー・データを扱っている。その後手探りながらもフォーマル・インフォーマル双方のインタビュー経験を積んできたが、同時にさまざまなワークショップや研究会に参加して、質的研究に関する方法論を学び続けてきた。これまで私が参加した方法論の講習会は実にさまざま、オーラルヒストリー、グラウンデッドセオリー、エスノグラフィー、そしてある研究者が独自に開発した「質的研究法」などである。これらのさまざまな「流派」の「質的研究」の方法論を学ぶことで、何とか自分の研究スタイルと研究テーマに合った「質的研究法」はないものか、と模索してきた。日本質的心理学会は、定期的に各種方法論の講習会を主催し、また各地の学会員が開催する講習会の知らせをメーリングリストで配布している。この日本質的心理学会に関係する各種講習会には、特にお世話になった。講習会の会場でお会いする研究者や大学院生の専門分野は実に多様だが、心理学、社会学、教育学、看護学分野の方が大半である。他分野の方々と実際に自分たちが直面している問題を話し合ったり情報交換したりすることは、自分の研究の参考になるだけでなく、大いに刺激を受ける経験である。

本稿では、2009年夏に参加した「現象学的研究方法ワークショップ」の概要を報告する。フッサール(1859-1938)に始まる哲学の流派としての現象学は、特に社会学の分野に大きな影響を与え、エスノメソドロジーや会話分析などに応用されている。今回のワークショップへの参加は、「他者の経験を記述する」質的研究法への現象学的アプローチの有効性を確認することにあつた。

2. A. ジオルジ氏について

今回のワークショップの講師は、米国カリフォルニア州のセイブルック大学院大学教授であるアメデオ・ジオルジ(Amedeo P. Giorgi)氏である。ジオルジ氏は、大学院生のころは実験心理学を学んでいたが、フッサールの現象学に影響を受けて、その後一貫して現象学的心理学の研究と方法論の彫琢に努めてこられた。”The Journal of Phenomenological Psychology”の創始者であると共に、25年間にわたって同誌のエディターを務めてこられた。1980年代に現象学的心理学に関する二冊の日本語訳本が出版されているが、現在ではいずれも絶版になっている。日本でこのようなワークショップを開催するのは、2004年に続いて2度目だという。

3. 現象学的研究方法ワークショップについて

ワークショップは埼玉県にある西武文理大学の看護学部において、2009年8月31日(月)から9月5日(土)まで6日間の集中講義として開催された。参加者は約50名である。看護学の研究者・大学院生が大半で、ほかに心理学と社会学分野の人が何人か参加している。近年、看護学の分野で質的研究に注目が集まっている。とくに現象学的心理学は、対象者の経験世界を対象者の視点から記述していく手法であるため、患者さんの意味世界を研究する看護学での応用が進んでいるのではないだろうか。講義は英語で行われたが、淑徳大学社会学研究科の

吉田章宏氏とプロの通訳者による逐語訳つきであった。

3.1. 現象学的方法とは

ジオルジ氏によれば、現象学的心理学の哲学的な方法として、つぎの3つの手続きを踏まねばならない。

- (1) 現象学的還元(Phenomenological Reduction)
- (2) 想像自由変更による現象の本質の探究 (Seek Essence with Method of Free Imaginative Variation)
- (3) 本質の記述(Describe Essence)

現象学的還元は、過去の自分の経験を括弧のなかに入れる (bracket past experience) ことであり、存在論的判断を控える (withhold existential judgment) ことである。今、自分が目の前にしている現象に自分の過去の知識や経験を持ちこまないことで、その特定の現象に対しての客観性を保つことが可能になるという。「存在論的判断を控える」ことを理解するために重要なキーワードは、現前 (present) の概念である。フッサールの現象学によれば、私たちが見るもの経験するものは、私たちにとって「現前している」が、必ずしも「存在している」とはいえないのだ。このことは、あえて噛み砕いて表現してしまえば、自分が見た現象に対して「これはこうしてこのように起こった」と断定するのではなく、「私が見たことは、こうである。」と、一歩下がって慎重になってみよう、という姿勢のようなものだともいえるだろう。

(2)の本質の決定に際して理解しなければならないことは、現象の本質を探究するときに、「想像自由変更(Free imaginative variation)の方法を用いて行うことである。想像自由変更の概念はとても難しく、一朝一夕には理解できないが、ジオルジ氏は教室の椅子を用いて、次のように説明された。「椅子の本質を理解するときに、その色がどうであるとか、材質がどうのこうのということは、本質ではない。背もたれがない椅子もあれば、脚がない椅子もある。しかし、「座席がある

こと」が椅子の本質であると見えてくれば、その後は、想像自由変更により、座席があるかぎりどんな形の椅子でも自由につくることができる。」この想像自由変更は、「ああいう椅子もあるし、こういう椅子もあった、だから全体的にはこういう椅子が多い傾向がある」、という確率的または経験的な一般化とは異なることに注意を要する。

現象学的心理学が目指すものは、あくまで「解釈」や「説明」ではなく、「記述」である。記述とは、現前するものに厳格にとどまらなければならない。まとめるならば、現象学的方法とは、現前する現象について想像自由変更によってその本質を探り、記述する方法であるといえよう。

3.2. 演習の概要

現象学的心理学の哲学的な手続きの説明のあとに、グループワークによる分析の演習が行われた。ジョルジ氏がアメリカで入手した現象学的心理学の手法による看護研究に関する英語のトランスクリプトとその日本語訳が各自に配布され、それを3人から4人のグループで話し合いながら分析を進めていく。私は2人の看護学の教員の方と同じグループになった。配布された看護研究の例は、「看護実践者の臨床体験を理解すること (To understand clinical experiences of nurse practitioners.)」を目的に、臨床看護の実践者を対象とし、彼女の臨床経験についてインタビューしたものである。私以外のグループ・メンバーは、自身も臨床看護師の経験を経てから看護学の教員になられた方であり、テキストを読みながらその情景がどんどん目に浮かぶようである。看護の現場を良く知らない私は、2人にいろいろ質問しながらテキストを読み進めていった。「自分の経験を括弧に入れる」のだから、何も知らなくても条件は同じような気がするが、「知らない」と「括弧に入れる」ことはやはり異なるのだ。自分が対象とする現象に通じている方が有利なことは間違いないことを実感した。

3.3. 分析の実際

ジオルジ氏は、「すべての質的研究は、(1)テキストを読む(Read)、(2)部分に分ける(Make Parts)、(3)データの変換(Transform Data)、(4)統合(Synthesize)の手続きを踏む」と説明したあとで、具体的な現象学心理学の方法における4つのステップを示された。

- (1) テキストを通して読み、概要をつかむ (Read for Sense of Whole)
- (2) 意味単位に分ける(Establish Meaning Units)
- (3) 意味単位を看護学の視点からより明示的に記述する
(Describe Meaning Units More Explicitly in Nursing Sensitive Language)
- (4) 構造を獲得する。(Get Structure)

(3)の「看護学の視点から」とは、演習の素材として与えられたトランスクリプトが看護学の分野であるからであり、通常は自分の収集したデータを記述することになるので、「自分が立脚する分野の視点から」と読み替えればよい。自分が社会学を専門としているのであれば、「社会学の視点から、社会学の言葉で記述する」と考えればよい。このステップに従って、演習がすすめられた。

全体を読んで内容をつかんだあとは、「意味の切れ目」ごとにテキストに区切り(/)を入れていく。ひとつの区切りが何センテンスにも渡ることもあるし、ごく短いこともありうる。これが意味単位で区切る作業である。グループ全員で区切りに関してほしい意見がまとまったら、その意味単位ごとに現象学的還元を行い、センテンスを変換し、記述する。この変換の過程は1度の場合もあるし、2度、3度とくりかえす場合もある。変換を重ねるごとに抽象度を上げていくのは、他の質的研究法と同様である。意味単位に変換したときの文章は、必ず「Pは、・・・」という書き出しで表現する。Pとは対象者のことで、Participantの意味である。英語では、たとえば次のようになる。(Pのあとの数字は、対象者1番、対象者2番~といったナンバリングであ

る)

- P1 states that she will respond honestly[~]
- P2 implies that she had it for a long time[~]
- P3 again reaffirms that[~]

分析者にとっての他者である対象者の経験を記述することが目的なので、このように記述することで客観的な視点を保ちやすくできるといえる。記述に際しては、「看護学の言葉」で、仮説や前提などの含意を明示するようにする。パラフレーズしただけで何の洞察も含まれていないものや、「過去の経験を括弧に入れることを忘れ」て、データの中に含意されていないものを含んだ記述をしないように注意する。

ジオルジ氏によれば、ジオルジ氏自身はこの「現象学的還元」のための意味の変換作業は、一度に5個の意味単位までしか行わないそうだ。5個終わったら、散歩をしたり他のことをしたりする。そして改めて還元した文章を読み直し、本当にその洞察がデータに依拠しているかどうか、自分のバイアスが含まれていないか確認する。確かに非常に骨の折れる作業で、演習時では、A4用紙1枚分の文章を変換するのに2時間もかかってしまった。

この「現象学的還元」をすべての対象者のデータに対して行う。ジオルジ氏によれば、インタビュー・データは、最低3名分得ることが望ましい。3人分のバリエーションから、想像自由変更を行い、一般化を求めることが可能になるという。

最後に、すべてのデータの意味単位から構造(Structure)を導き出し、記述する。ジオルジ氏は、「すべてのバリエーションを貫く共通するものがあれば、それは本質といえるだろう」としている。想像自由変更により本質を探り出し、その構造を定義する。しかしながら、「一般化をする」ということは、無制限に該当するというのではなく、あくまでも「ある限定された条件のもとでの普遍性」であると、ジオルジ氏は述べている。

3.4. 感想として

質的研究法のなかには、コーディングを行い、概念といった比較的短い単語や句、あるいは文節といった単位への変換を行う手法も多いが、ジオルジ氏の現象学的心理学では、あくまで文章に変換する。この点において、現象学的還元を行う際に洞察を含んだ豊かな表現による記述を行うことができさえすれば、分析の段階で多くの抽象度をあげた文章を得られるため、比較的少人数の事例に親和性が高い手法であると感じた。具体的には、個人の経験を深く追求するライフストーリーといったいわゆる「深い (in-depth)」インタビューにも応用可能性があるといえるだろう。

このワークショップに参加して、あくまでも「他者の経験世界からの記述」を目的とする現象学的アプローチは、特に認識論的観点において、質的研究方法に有効であることを再認識した。

4. おわりに

質的研究は、仮説発見型の研究といわれる。質問紙調査といったいわゆる「量的調査」のように最初の設計段階で質問項目を固定することなく、半構造化インタビューや非構造化インタビューでは、調査途中での路線変更が比較的容易である。質的研究によって構築された仮説を量的研究で検証するといった混合手法も有効な手法のひとつである。しかしながら、質的研究法とは、「とりあえず多くのデータを集めれば何か出てくる」という手法ではないことを強調しておきたい。これまでに私が学んだどの質的研究法においても、しっかりとした目的なしに、インタビューに臨むことはない。量的研究法に適したリサーチ・クエスチョンをたて、それに質的研究法を用いても、うまくいくことは少ないだろう。第一に、質的研究法に適したリサーチ・クエスチョンがたてられるか。第二に、リサーチ・クエスチョンに合致した対象者（現象

学的心理学ではパーティシパント)を得ることができるか。第三に、リサーチ・クエスチョンに適合する回答がひきだせるような質問項目がつかれるか。といったステップ・バイ・ステップの研究計画が非常に重要である。データに基づいて分析を進め、データから概念を抽出したり記述したりといった研究手法を採用する以上、データの精度は命である。今回のジオルジ氏の現象学的心理学も、例外ではない。分析の段階で、何度も「最初の目的にもどきなさい。あなたは何を理解しようとしているのか。確認してからテキストを読みなおしなさい。」と繰り返された。

これまで、講習会の講師の方々だけでなく、参加者の方々からもフォーメール・インフォーマルに質的研究について多くのアドバイスをいただいた。いただいたアドバイスを自分の研究に生かしていくことで、御礼にかえさせていただきたいと思っている。

謝辞

「科学におけるコミュニケーション」プロジェクトに参加させていただき、科学者に対するインタビューの経験を積む機会を与えてくださった平田光司先生に感謝します。松岡啓介先生(総研大・核融合科学研究所)は、「大学共同利用機関の歴史」プロジェクトおよび「核融合科学研究所アーカイブ室共同研究」に参加させてくださると共に、インタビューの経験を積む機会を与えてくださいました。また、定期的に研究の進捗状況を報告する機会とアドバイスを与えてくださいました。深く感謝します。人類学者のSharon Traweek先生(UCLA)は、2008年の総研大・海外学生派遣事業を利用した私のアメリカ滞在におけるホストになってくださっただけでなく、その後もずっとメンターとしてメールでのアドバイスと励ましを続けてくださっています。ここに記して感謝申し上げます。

文献

Emerson, R., Fretz, R., Shaw, L., 1995, Writing Ethnographic Fieldnotes, The University of Chicago Press.

Giorgi, A., 2009, The Descriptive Phenomenological Method in Psychology: A Modified Hueerlian Approach, Duquesne University Press.

Smith, J., Harre, R., Van Langenhove, L. (eds), 1995, Rethinking Psychology, Sage Publications.

Richards, L., 2005, Handling Qualitative data: A Practical Guide, Sage Publications. (=2009, 大谷順子・大杉卓三 訳『質的データの取り扱い』北大路書房.)

Morse, J., and Richards, L., 2002, Readme First for a User's Guide to Qualitative Methods, Sage Publications. (=2008, 小林奈美 監訳『はじめて学ぶ質的研究』医歯薬出版)

Giorgi, A., 訳・構成 吉田章宏 看護研究への現象学的方法の適用可能性 看護研究 37巻5号(2004.09) P.421-429.

Giorgi, A., 訳・構成 吉田章宏 経験記述資料分析の実際—現象学的心理学の『理論と実践』看護研究 37巻7号(2004.12) P.607-619.

戈木クレイグヒル滋子 2008 『実践グラウンデッド・セオリー・アプローチ』新曜社

西條剛央 2008 『ライブ講義 質的研究とは何か SCQRMベーシック編』新曜社

佐藤郁哉 2008 『質的データ分析法 原理・方法・実践』新曜社